モンスター娘に襲われるＡＳＭＲ　フェアリーのキャシー編

（Attacked by a Monster Girl ASMR -Fairy Girl Cathy Version -）

あらすじ：

冒険者が何度も挑む大樹海。樹海にはたくさんの妖精たちもいる。彼女たちは純粋無垢であり、戦う力もほとんどもたない。しかしそれは、妖精が危険でないことを意味しない……むしろその逆である。
彼女たちは妖精特有の純粋さと好奇心を持ち、人間『で』遊ぶことを楽しんでいる。フェアリーのキャシーは、特に人間に興味津々の妖精だった。妖精との交流を求めた人間を見つけ、『射精』という特有の現象を引き出すために、キャシーは人間の肉体を好き放題にもてあそぶ。
自分の身体より大きいペニスを挿入されても、妖精は平気である。むしろ情けない声をあげる青年を、面白いおもちゃとして楽しんでしまう。
そしてキャシーは、自分を交尾で『わからせ』てみるか――それともその体を自分に差し出して、脳を乗っとる『チェンジリング』をするか、逃げ場のない二択を突きつけるのであった。

登場キャラ：

フェアリーのキャシー：
樹海に数多いる妖精の一人。金髪ツインテールで、いかにも幼児といった体型であるが、妖精としては立派な大人である。純真無垢ではあるが、それゆえに人間のことはただのオモチャとしか認識しておらず、『男をいじったら精液が出て面白い』と、好奇心のままに様々なイタズラを仕掛ける。しかし、責められたら意外と弱いところもあるらしい……？　冒険者の意識をすべて奪い、妖精の玩具にする『チェンジリング』を楽しんでいる。

冒険者：
小さいころから、あちこちに妖精を見つけるのが得意だった青年。そのため他の子どもたちと話が合わず、『妖精の子ども』だと言われていた。青年と言える年になっても周囲になじめず、妖精となら友達になれるかもしれないと樹海におもむく。小さい妖精をカワイイと思っている。妖精のオモチャにされるとは露知らず、キャシーと交流を求める。

（※制作都合上、一部内容を変更した箇所があります）

１．　　出会い　～樹海のメスガキ～

キャシー「くすくす……」
キャシー「くすくす……ねえ～？　どこ見てるの～？　きゃはっ」
キャシー「もー、人間ってトロいなあ。妖精の姿、全然見えないんだね」

キャシー「あー、やっとこっち見た。くすくすくす……お兄さんってばのろまなんだからぁ。アタシのこと全然、見つけられないなんて……くすくす」
キャシー「ここは樹海……妖精の森だよ。人間さん、何しに来たの？　樹海は危険な魔物や、ヤバイ女の魔物がたくさんいて……とーっても危ないんだよ？　くすくす……」
キャシー「へ？　妖精に会いに来たの？　わざわざ？　ふう～～～ん……お兄さん、人間のくせに妖精が好きなんだぁ」
キャシー「こーんな……人間の指に乗っちゃうくらい小さい女の子と、お話したいの？　うわあ～ヤバ～♪　人間となじめないから、妖精に救いを求めちゃう、可哀想なお兄さんなんだ～♪　くすくすくす……」
キャシー「じゃあ、キャシーと遊ぶ？　キャシーね、一度、人間さんとた～っぷり、じ～っくり遊んでみたかったんだ～♪」
キャシー「じゃあ、なにして遊ぼうか？　カブトムシに乗る？　それとも葉っぱのかくれんぼ？　う～ん……お兄さん、ムダに大きいから、私たちがやってる遊びはできないかも～……ざぁ～～んねん♪」
キャシー「あ、そうだ！　アレならできるよ！　昔からね、人間さんが来たらできる、楽しい遊び♪」

キャシー「それはねぇ……くふふ♪　しゃせー遊び……だよっ♪」
キャシー「お兄さんのちんぽを、キャシーがいじってぇ……たくさん遠くに射精させたら勝ち～♪」
キャシー「キャシーね、人間ちんぽ射精させるの、とっても上手なんだよ～♪　ねえ、いいでしょ～？」
キャシー「まあ、嫌だって言ってもぉ……この妖精の住処は、一度入ったら出られないトクベツな場所だからぁ……その辺で野垂れ死にしたくなかったら、おにーさんはキャシーの言うことを聞くしかないんだよ……？」

キャシー「きゃはははっ……キャシーといっぱい遊ぼーね、おにーさん？　きゃはははは♪」

２．　　耳舐め　～耳孔侵入～

キャシー「キャハハハ……本物の人間で、射精遊びするの、久しぶり～♪」
キャシー「まずはねぇ……耳をたっぷり舐めてから、魔法をかけて……たーくさん射精できるように改造するの♪　キャシーね、ちゃんと覚えてるよ♪」
キャシー「妖精はね、魔法のお花の蜜を飲むんだよ～。だから妖精の体液には、魔法の力があるんだって～♪　くすくす、すごいでしょ～♪」

キャシー「あっ、動かないでね。キャシー、魔法はあんまり上手じゃないんだからぁ」
キャシー「人間さんが暴れると、魔法が失敗して、とーんでもないことになっちゃうかもよぉ？」
キャシー「頭のなかめちゃくちゃになって、廃人になっちゃうかも……まあ、それはそれで、オモチャとして遊べそうだけど……きゃはっ♪」

キャシー「くすくす……ほぉら、お兄さんの耳に来てあげたよ～。人間って耳も無駄に大きいんだね……？」
キャシー「おっきな穴の中……ああ～♪　こんなに垢がこびりついてる～、きったなぁ～い♪　お兄さん、ちゃんと掃除してないでしょう～？」
キャシー「キャシーってね、結構キレイ好きだからぁ……まずはお兄さんのお耳をお掃除してあげるね～♪　きゃはは♪」

キャシー「はぁい、じゃ～ん、妖精のホウキだよぉ～♪　これで今から、お兄さんのお耳の中をいじってあげるねえ～」
キャシー「カワイイキャシーちゃんがお耳掃除してあげるから、お兄さんは動かないでよ～？」

キャシー「ほぉらぁ……こうやってぇ～……お兄さんのお耳の中に、手を伸ばしてぇ～……」
キャシー「ホウキを使ってぇ……こちょこちょこちょこちょ～♪　奥まで……ごそっ……ごそっ……ってしたらぁ……」
キャシー「きゃはっ、出てきた出てきたぁ。きったな～い耳垢、いっぱいとれちゃった～♪　うへぇぇ、ばっちぃ～♪」

キャシー「くすくす、こしょこしょ気持ちいい～？　お兄さん、おっきいのに情けない声だしてるよ～？　ほぉら、こしょこしょ～……こしょこしょ～♪」
キャシー「あんっ、動いちゃダメだってばあ、キャシーがお掃除してるのに、動いたら……

キャシーの手が鼓膜までぶっすり、突き刺さっちゃうかもよぉ♪」
キャシー「大人ならちゃあ〜んと、動かず我慢できるよね〜？　ほーら、妖精のホウキでぇ、耳の中を……こしょっ、こしょっ、すりすりすり〜♪」

キャシー「……うん、こんなもんかな？　きゃははっ、キャシー、お掃除じょーずだったでしょ？」
キャシー「じゃあ、今度はぁ……キャシーが綺麗になったお耳を舐めてあげるね〜？　お兄さんのお耳に、キャシーの唾液をいっぱい塗りつけるよ〜？」
キャシー「んんん〜……れろぉ〜〜〜〜♪　んぁぁ〜♪　ほうら、妖精の魔法の唾液だよぉ〜、きゃははっ♪」
キャシー「じゃあ、いきま〜す♪」

キャシー「んんっ……じゅぶ……れるっ、んおっ……じゅる、れるれるれる〜♪」
キャシー「くひひっ、奥までぇ……舐め舐めしてあげる〜♪　じゅぶっ、じゅるっ……じゅばぁっ……んんっ、じゅぶっ……」
キャシー「あんっ、動いたらダメだってばぁ……れるぅっ、んんっ、あむ……じゅぶ……穴の内側からぁ……こうしてぇ……」
キャシー「じゅぼ……れるっ……んんんっ……」
キャシー「んっ……ぷはぁ……♪　ふう〜……お兄さん、キャシーの耳舐めどうだったぁ〜？　魔法の唾液で、えっちな気分になってきたんじゃないの〜？」
キャシー「あはっ♪　情けない顔してる〜♪　魔法の効果はばっちりだね〜♪　それじゃあ、次はぁ……♪」

キャシー「ちゃんと左の耳も、お掃除してから舐めてあげないとね〜」
キャシー「キャシーは綺麗好きだから、片方しか掃除しないとか、ゼッタイ許せないタイプなの。くすくすくす……」
キャシー「それじゃあ、またホウキを取り出して……きゃはっ♪　お兄さん、準備はいいかな〜？　そぉれっ……♪」
キャシー「わぁ〜、左のお耳も、垢がいっぱぁ〜い、人間ってどうしてこんなに汚いの〜？　信じられないんだけど♪」
キャシー「キャシー、こんなところ舐めたくないからぁ……こうやってこちょこちょってしてぇ……キレイにしないとね〜♪　ほおら、こちょこちょこちょ〜」
キャシー「妖精に耳かきされちゃってる、甘えん坊お兄さん〜、今度からはちゃんと自分で掃除してきてね？　キャシー、お母さんじゃないんだからぁ」

キャシー「んしょ、んしょ……っと……んもぉ〜、なんで人間ってこんなに大きいの〜！

キャシーじゃ掃除するのも大変だよ〜！」
キャシー「ホウキで奥まで、綺麗にして〜……うん♪　よぉし、一番おっきいゴミがとれたよ〜♪　くすくすくす、やあっとお耳が綺麗になったぁ〜♪」
キャシー「は〜い、それじゃあまた、妖精の唾液をたっぷり塗りつけて、射精遊びができるように改造してあげるね〜♪」

キャシー「ん……じゅぶ……れるぅう〜……んんっ、じゅぱっ、んむっ」
キャシー「んん〜？　右のお耳よりちょっとしょっぱいかなぁ〜？　あんまり美味しくないからぁ、今度来るときはちゃんとお耳も洗ってきてよ〜？」
キャシー「じゅば……んぶっ、れる……あむっ……じゅぶ……」
キャシー「ぷはぁ……ふう〜。あはは、お兄さん、キャシーがい〜っぱい舐めちゃったからぁ、どっちのお耳もどろどろになってる〜！」
キャシー「でも妖精の唾液は、お花の匂いでと〜ってもいい香りでしょ？　その匂いにも魔法がこもってるからぁ……思いっきりしゃせー遊びできるよ……♪」
キャシー「くすくすくす……ああっ、もう、おちんぽもおっきくなってるのが丸わかりだぁ、なっさけな〜い♪」

キャシー「お兄さん、妖精にお耳舐められて、せーえき出したいんだ？　くすくすくす……♪」
キャシー「キャシーは優しいからぁ……すぐ勃起しちゃうよわよわおちんぽさんも……これからたーっぷり射精させてあげるね〜♪」

３．　　全身コキ　～ちっちゃくてもできるもん～

キャシー「くすくす……じゃあ、早速おちんぽいじっちゃお～っと♪」
キャシー「キャシー、知ってるよぉ。人間の男って、おちんぽをごしごししたら、白い精液がどぴゅどぴゅ～って出るんでしょ？」
キャシー「キャシー、射精させるの得意だよぉ～♪　おにーさん、どうせドーテーなんでしょ？　ドーテーちんぽには刺激強すぎるかもね～♪」

キャシー「それじゃあ、こうやってぇ、お兄さんのちんぽの上に乗ってぇ……っと」
キャシー「きゃはっ♪　ズボンがもうぱんぱん！　面倒くさいから脱がしちゃうね～！　え～いっ」

キャシー「あははっ、すご～い、キャシーの耳舐めの魔法で、お兄さんのちんぽ、すっごく硬く、おっきくなってる～っ！」
キャシー「見てみて、キャシーの身長と同じくらいのちんぽだねっ♪　ここから精液どぴゅってするの、楽しそ～♪」
キャシー「……あ～、お兄さん、なにその顔？　もしかしてキャシーがちっちゃすぎるから、ちゃんと射精させられない、とか思ってるんでしょ～？」
キャシー「失礼しちゃう！　キャシー、ケイケン豊富だもん！　ちっちゃくても、このおちんぽオモチャにして、ちゃ～んと射精遊びできるもん！」

キャシー「ほら……こうやってぇ……キャシーの身体をぉ……ちんぽにこすりつけてぇ……ず～り、ず～り、ず～りぃって……やるんでしょ～？」
キャシー「あはっ、ちんぽが嬉しそうに跳ねたぁ～♪　ほら、キャシーちゃんとできるでしょ？」
キャシー「妖精のちっちゃい体でぇ、ドーテーちんぽを抱きしめて……前後に、いっちにっ……さんしっ……いっちにっ、さんし……」
キャシー「んっしょ……んっしょ……こうやってぇ……おまたと胸を、ちんぽにこすりつけてぇ……んっ、あんっ……んんっ」
キャシー「きゃはっ、あんっ♪　キャシーも楽しくなってきたぁ……あんっ、んっ……」
キャシー「人間の情けない顔見ながらぁ……おまたでちんぽずりずりするの……んっ、結構好きなのよね～♪」

キャシー「あんっ♪　ああ～、ちんぽの先から、ドロドロがあふれてきたぁ～♪」
キャシー「キャシー知ってるよぉ、これ『がまんじる』でしょ～♪　きゃはは♪　妖精のち

っちゃな身体でぇ、興奮しちゃってるんだぁ～♪」
キャシー「『がまんじる』のあとは精液がでるからぁ……きゃはっ、も～っとずりずりしちゃうからね～♪」

キャシー「出てきた我慢汁をぉ……キャシーの身体に塗りつけてぇ……んんっ、はぁんっ……やだぁ～♪　どろどろ～♪」
キャシー「でもこれでぇ……んんっ、よいしょっ……んっ……さっきよりスムーズに、キャシーの全身でぇ……しこしこできちゃうよ～……」
キャシー「んっ、あんっ……はあん……我慢汁が出てくる穴もなめちゃお～っと♪　じゅぶっ……れるっ……んむっ……じゅぶ……♪」
キャシー「ぺろ……ちゅる……っ♪　あんっ♪　ちゅっ、ちゅるっ、れるれる～♪　ちゅぱぁっ……んはぁっ……じゅぶ、ちゅるるるる～♪」

キャシー「じゅっこじゅっこ……ぬっちゅぬっちゅ……し～こし～こ……きゃは♪」
キャシー「くすくす……おにいさ～ん、気持ちいですかぁ～？　小さい妖精ちゃんにちんぽ全身ズリされてぇ……はあはあ興奮しちゃってますかぁ～？」
キャシー「きゃははは♪　腰がへこへこ動いてる～♪　妖精にいじめられて精液だしたい？　射精したいの？　なさけな～いっ♪」

キャシー「ほらほらぁ、出したいならぁ、キャシーにちゃんとお願いしなくちゃ～♪　しゃせーさせてくださぁい、お願いしまぁすって……」
キャシー「言わないとやめちゃうよ～？　いいの～？　キャシーの全身コキコキで射精したいんじゃないの～？」
キャシー「ほらっ、言っちゃえっ♪　情けなく射精おねだりしちゃえっ♪　えいえい、え～い♪」

キャシー「……きゃはははっ♪　射精おねだり、よくできました～♪　情けなくおねだりできたからぁ、このままイかせてあげるね～♪」
キャシー「ほうら、いっちに、いっちに、カリのところはちっちゃなお手でぞりぞり～って撫でてからの……全身コキ～♪」
キャシー「だ～せっ、だ～せっ。妖精にオモチャにされて、情けなくイッちゃえ～♪」

キャシー「きゃはははっ♪　ああ～、白いどろどろいっぱいでたぁ～！　すっご～い、いっぱいドーテー精液でたぁ～♪」
キャシー「って、あぶっ……うえぇ……ちょっとぉ！　キャシーにまでぶっかけないでよぉ～！　髪がどろどろになっちゃうでしょ～！」

キャシー「うえぇぇ、にがぁ〜い……どろどろ〜……！　ぺっぺっ、んもう！　オモチャのくせにわがままちんぽなんだからぁ〜♪」

キャシー「キャシーをどろどろにした罰として、このままセックス遊びもするからね！」
キャシー「妖精のおまんこにちんぽいれて、たくさん射精させてあげるんだから！　休憩なしの連続射精だからね！」
キャシー「泣いたって許してあ〜げないっ！　覚悟しなさいよね〜！」

４．　　性交　～オナホ妖精～

キャシー「きゃはっ、じゃあそろそろ～……しゃせー遊びの本番、おちんぽをキャシーの中にいれちゃおっかなぁ～」
キャシー「あっ、お兄さん、乱暴にしちゃダメだからね。主導権は全部キャシーにあるの。だって、お兄さんが乱暴したら、いくらキャシーでも痛いんだから」
キャシー「キャシーに怖いことしたらぁ……お兄さんを、おちんぽ丸出しのまま、永遠にこの森の迷子にすることだって……できるよぉ？　……くすくす♪」

キャシー「はーい、今ね、お兄さんのびんびんちんぽの上にまたがったよ～」
キャシー「きゃははは……キャシーのおまたから、でっかいちんぽが節操なく主張しちゃってる～♪　キャシーにすぐ負けた雑魚ちんぽなのに、妖精と交尾したいよ～って言ってるぅ～♪」
キャシー「キャシーは優しいからぁ……女の子と交尾したことないみじめなおちんぽ、キャシーのおまんこに入れてあげるねぇ……くすくす……♪」

キャシー「ほらぁ……あんっ……んっ、お兄さんのおちんぽがぁ、キャシーのおまんこに入ってくるよぉ……」
キャシー「太さだけは立派なおちんぽが、キャシーを犯してるぅ……あんっ、キャシーのお腹、ぐんぐん広がってくぅ……んおっ……おうっ……」
キャシー「きゃははっ、半分入ったところで止まっちゃった～♪　全部入らなかったけど、見てみて、キャシーのお腹、おちんぽの先端でぼこぉってなってるよ♪」
キャシー「あはっ、お腹はねた～♪　お兄さんのザコちんぽ、キャシーのお腹に入れてうれしいって言ってる～♪」
キャシー「……えっ？　そんなお腹で大丈夫かって？　全然平気だし～。妖精は人間と違うから、自分の身体くらいのおちんぽも、ちゃんと入るんだよ～」

キャシー「なんだっけ……前に遺跡のゴーレムが……こういうのを教えてくれて……」
キャシー「あっ、思い出したぁ、そうそう、『おなほ』ってやつ！　今だけキャシーが、おにーさんのオナホ妖精になってあげるね、嬉しいでしょ～♪」
キャシー「だからぁ、無様にた～くさん、精液出さなきゃダメだよ～、きゃははっ♪」

キャシー「ほ～ら、キャシーが動いてあげる～……妖精のおまんこでぇ、おちんぽしごいてあげるよ～」
キャシー「ん～しょっ、んん～しょっ……んっ、あんっ、んあっ……も～、おにーさん、勝

手に腰振っちゃダメぇ～」
キャシー「キャシーが動きにくいでしょぉ～。おにーさんは大人しく、キャシーに犯されてればいーのっ！」

キャシー「んっ……あんっ、ぁっ……んっ……んん～、まあ、ちんぽの硬さはまあまあかなぁ～？」
キャシー「キャシーを満足させるには、ちょぉ～っとザコちんぽすぎるけどぉ……まあ使ってあげなくもない、的な？」
キャシー「ほらほら、キャシーのせくしーな腰フリはどう～？　んんっ、はあんっ、あんっ……やんっ……おちんぽ固くなってきたぁ～♪」
キャシー「ちっちゃな妖精ボディ、そんなに好きなんだ～♪　うわぁ、へんた～い♪　ちんぽも頭もド変態の、やばぁいおにーさんだぁ～♪」

キャシー「んっ……はぁんっ……もう、そんなザコちんぽ喜ばせる趣味、キャシーにはないんだからねぇ～？」
キャシー「おにーさんは大人しく、キャシーをたっぷり気持ち良くしてからぁ……あんっ……んんっ、精液吐き出せばいーのっ……」
キャシー「あ、許可なく射精するのはルール違反だからね～？　あんっ……んおっ……ぁんっ……しゃせー遊びは、妖精の合図がないと射精しちゃいけないんだよぉ～♪」

キャシー「ほらほらぁ、こんなにされてもぉ……おにーさんは我慢しなくちゃいけないのっ！　ほらっ……ほらぁっ！」
キャシー「んっ……んおっ……おほっ……！　あんっ、激しくしたらぁ……キャシーのお腹にもちんぽごつごつ当たるぅ……っ！」
キャシー「これぇっ、結構イイかも～♪　あんっ……はんっ……んんんっ、あんっ、おうっ……おほぉっっ！」
キャシー「きゃはは、良い感じ～♪　ほらほら、お兄さん、腰びくびくさせてないでぇ～、もっと我慢しなきゃダメだよ～！　きゃははっ」
キャシー「あんっ……んおっ……んんぁっ……おうっ……んふっ、ひひひ……♪　キャシーもぉ、興奮してきたかもぉ……♪」
キャシー「んぉ……んんっ！　はあんっ……！」

キャシー「えっ、お兄さんどうしてそんな、情けない顔してるの？　イきそう？　射精したいの～？　はあ～？　信じらんない～♪」
キャシー「キャシー、やぁっと気持ち良くなってきたのに……あんっ、んおっ、ダメ、ダメだよ～？　妖精様の言うこと聞いてぇ、もっと我慢して～？」

キャシー「はんっ……おうっ、んおっ……そうそう、そのちんぽ最大に固いままで……んぉっ、おふぅ……キャシーのお腹ぁ、ごつごつ叩いて〜♪」
キャシー「えっ？　もう無理？　えっ、ちょっと待ってっ、まだ終わりにするのイヤ……あっ、嘘……おちんぽ膨らんで……嘘っ、ダメ！」
キャシー「まだダメなの〜っ！　もっと交尾するの〜！　我慢してぇ！　我慢しろこのバカちんぽ〜っ！」
キャシー「ダメっ、ダメダメっ、止まれぇ〜っ！　ダメダメダメダメダメ〜〜〜〜ッ！」

キャシー「おふうっ⁉　んおおっ！　ンあぁっ⁉　あうぅ……んほっ、んおおおっ⁉」
キャシー「ん〜んぉっ……ざこちんぽ精液がぁ……おおっ……キャシーのお腹にぃ……びしゃびしゃってかかってるぅ……んおおおっ、あうっ……おうっ……」

キャシー「はあんぅっ……抜けちゃったぁ〜、ああっ……おう、おまんこからぁ、精液がびしゃびしゃって噴き出してるっ……んおっ、はんっ……」
キャシー「このぉ〜……ざこちんぽのお兄さん！　キャシーの言うこと全然聞いてくれないんだから！　信じられない！」
キャシー「ざ〜こざ〜こ♪　すぐイッちゃうこらえ性なしちんぽ〜♪　ああ〜もう〜、キャシー、全然満足できてないんだけどぉ〜！」

キャシー「こうなったらぁ……ざこちんぽを徹底的に教育するしかないみたいだね……きゃはははは♪」
キャシー「ざこ卒業のために、キャシーがお兄さんのこと、しっかり射精できる人間おもちゃとして調教してあげるからぁ……」
キャシー「一緒に、練習がんばろうね、お兄さん……くすっ、くすくすくす……」

５．　　休憩　～バカにされると興奮するんだぁ～

キャシー「さあて、と……お兄さん、つよつよちんぽにするためにはぁ……またちんぽバキバキにしてほしいんだけど……」
キャシー「二回も射精して、ちんぽふにゃふにゃになっちゃったね～。もうおしまいなの～？　あ～あ、つよいおちんぽになるには時間かかりそう～……」
キャシー「くすっ……♪　でもだいじょーぶ、キャシー、こういうときどうしたらいいか、ちゃ～んと知ってるよ？」
キャシー「おにーさん、休みながらでいいから、耳貸して～？」

キャシー「ざ～こ♪　ざ～こ♪　ざこざこドーテーちんぽ～♪」
キャシー「妖精の全身ズリとぉ……腹ボコセックスでぇ……もうふにゃちんになっちゃった、使えないちんぽ～♪」
キャシー「せっかくキャシーが遊んであげてるのにぃ、ぜんぜん交尾できない残念ちんぽ～♪　かわいそう～♪　くすくすくす……♪」

キャシー「くやしかったらぁ……さっさとちんぽ勃起させてぇ、キャシーにしゃせー遊びの楽しさ、教えてよぉ～♪」
キャシー「ねえ～、はやくぅ～。ちんぽで気持ち良くなりたい～……あっ♪　でもどっちにしてもぉ……おにーさんのよわよわちんぽじゃ、気持ち良くなれないかな～？」
キャシー「あ～あ、せっかく見つけた人間なのにぃ……こんなに射精できないなんて、キャシーがっかり……」
キャシー「ざこのお兄さんはここに捨てていって……ちゃんと、つよつよちんぽ持った人間のとこに行こうかなあ～♪」

キャシー「あはぁっ♪　いま、おちんぽぴくんってなったぁ～♪」
キャシー「やっぱり人間って～、バカにされると興奮するんだぁ～♪　くすくす、ちっちゃな妖精にバカにされて、ちんぽびくびくさせるなんて～……」
キャシー「人間って聞いてた通り、性欲だけは猿並みの、ド変態生物なんだね～♪　くすくす～……おっもしろ～い♪」
キャシー「キャシーがいっぱいバカにしてあげたから、お兄さんもゆっくり休憩で来たね～♪　良かった良かった、きゃははっ♪」

キャシー「じゃあ、ちんぽも反応したことだし……しゃせー遊びの続き、やっちゃお～か？」
キャシー「さっさとつよつよちんぽになってぇ……キャシーにしゃせー遊びの楽しさ、わか

らせてね……おにーさん♪」

６．　　指で逆転チャレンジ　～わからせられるかな～

キャシー「ていうかぁ……さっきから、お兄さんばっかり気持ち良くなってる気がするんですケド～」
キャシー「キャシーのこともちゃんと気持ち良くしてよぉ。他の妖精が捕まえた人間は、妖精を気持ち良くするの、とっても上手なんだって～」
キャシー「くすくす……ちゃあんと気持ち良くできたらぁ、キャシーもお兄さんに、ちょっとだけ優しくしてあげちゃうかも……？」
キャシー「言っとくけど、キャシー、乱暴なのはイヤだからね。レディなんだから、大事に扱ってくれないと」
キャシー「とりあえずキャシーのおまんこ、指で触ってよぉ、優しくだからね」

キャシー「きゃははっ、やっぱ～い、お兄さんの指震えてるんだけど～。妖精に触るの怖いの～？　小心者～♪」
キャシー「優しく触れって言ったケドぉ、震えた指で触られるのも嫌なんですけど～♪」
キャシー「仕方ないなあ……こうやって、足を開いてあげるからぁ……ちゃんと指でおまんこ気持ち良くしてね～♪」

キャシー「あんっ♪　小心者のお兄さんの指、キャシーのおまんこに当たってるぅ」
キャシー「そうそう、ちっちゃい妖精の……ちいさなおまんこ、指で優しく……はんっ……あっ、んんぁっ……なんだぁ♪　やればできるじゃん♪」
キャシー「そのくらいの力加減でぇ……んっ……ああっ……んぅ、ふうっ……いい、いいじゃ～ん……んんっ」
キャシー「やだぁ～、キャシーのおまんこ、びしょびしょになってきちゃった♪　お兄さんの指もどろどろだね……んんっ、妖精の愛液、いい匂いでしょ～♪」
キャシー「あんっ、お兄さんの息が荒くてキモ～いっ♪　んっ、ふうん……はあはあって、生暖かい息がキャシーにも当たるんですケド～……きゃはははっ♪」

キャシー「んんっ、あっ……あんっ……やだぁ、キャシーのお腹の下……んっ、どんどん熱くなっちゃってる……」
キャシー「お兄さん、んっ、ちんぽはぁ、ざこだったのにぃ……結構、手先が器用なんだね……あんっ、ひんっ……どんどん、キャシーのおまた濡れちゃうよぉ……」
キャシー「もしかしてぇ……ちっちゃなお人形でも使って、えっちなことしてたぁ……？　それでこんなに上手なのかな～？　うわあ、そうだったらキモっ……どん引き～～～っ♪」

キャシー「えっ!?　んぁっ……嘘っ、はあんううっ！　んぁぁっ」
キャシー「ああんんんっ、やだぁっばかぁっ！　そんなに強くこすったらぁぁっ、あんんんっ、キャシー、体がびくびくってぇ……！」
キャシー「くひぃいぃっ!?　んんんぅ、やだぁ、キャシーのクリトリス、そんなにしつこくしたらやらのぉっ……んんっ！　ひいんっ……！」
キャシー「ばかばかっ！　お兄さんのばかぁっ！　えっち！　妖精をエッチにいじりまくるド変態ッ！　あんっ……んんんっ！　ひゃあんっ……ひんんんっ！」

キャシー「ああんんんっ！　ひつこいぃぃっ、陰キャお兄さんのしつこいおまんこ責めぇっ、やだぁぁっ、気持ちいいいいっ！」
キャシー「んんっ、もっと優しくしてよぉっ……バカ人間っ！　あんんんっ！　んはぁぁっ！　んぁっ！　あひんんんっ！」
キャシー「んもーっ！　いっぱいバカにしたの謝るからぁぁっ！　ごめんなさい！　ごめんなひゃいっ！　ごめんって言ってるのにぃぃいぃ！」
キャシー「んんんぁぁぁっ！　イクっ！　これヤバイぃぃ！　ヘンタイおにーさんのしつこい指責めでイクっ！　さっきイケなかった分、おっきいのくりゅううっ！」
キャシー「んおおおっ！　ほおおっ！　おおんっ！　イクぅ！　あーイクっ、イクイクイクイクイクのおおおっ！」

キャシー「んんんんほおおおおおっ！　んあああっ！　ああううんっ！　あああイッてるぅぅイッてるからぁぁッ！」
キャシー「イってるからぁ、指止めてよぉぉっ！　おんっ！　あひんっ！　んんんぁぁっ！」

キャシー「くひいいいんんっ!?」
キャシー「あぁっ……あーっ……んおおおっ、イキまくってるおまんこにぃ、おにーさんの指ぃ……んんほおおっ、はい、入っちゃったぁ〜〜〜……っ！」
キャシー「おひいぃいっ、またぁ、まらイグっ……おおっ、おうっ、妖精腹ボコされて、またイクっ、イグうううぐぅうう〜〜〜〜〜〜ッ！」

キャシー「んおおおっっ！　あああんんんっ！　イグっ、お腹の中、全部に指いれられていきましゅううっっ！」
キャシー「くひっ……んおっ……ああはあ……からだぁ……びく、びくってなってるぅうう……」

キャシー「んおおお……はあっ、はあっ……ああ〜……」
キャシー「ばかぁ、ばか人間……キャシーをこんなに乱暴にするなんてぇ……そんなの許し

てないんだからぁ……」
キャシー「そりゃあ、気持ち良くしろって言ったけどぉ……あはぁ〜……キャシー、よだれと涙でべとべど……どーしてくれんのよぉ……」
キャシー「もうキャシー、キレちゃったからね……？　今度はお兄さんをしゃせーさせまくって、泣かしてやるぅ……」
キャシー「んおっ……おほっ……あっ、また、浅イキしちゃってるぅ……もー……妖精の本気、わからせてやるからねえ……」

７．　　二回戦　～腹ボコ～

キャシー「ふう……さっきはちょっとびっくりしちゃったけどぉ……」
キャシー「いい？　キャシーが人間で遊んでるのよ？　キャシーのほうをオモチャにするなんて許さないんだからね？　わかった？」
キャシー「わかったなら、さっさとちんぽを大きくして、キャシーと遊ぶのっ、ほーらっ！」
キャシー「ざこちんぽを負かして、一生キャシーのオモチャにしてあげるんだからぁ」

キャシー「きゃはははっ、ざぁ～こ♪　って言ったらすぐにおっきくなったぁ～♪」
キャシー「お兄さん、やっとオモチャの自覚が出てきたかな～？　それじゃあ、キャシーのおまんこに入れちゃうよ～？」

キャシー「んんっ、んおっ……あっ、やっぱりぃ……っ、んんんっ、人間のざこちんぽお……おうっ、おっきすぎるぅ……ッ　んんぁっ！」
キャシー「ていうか……さっきより大きくなってるような……んんぅっ、はうっ」
キャシー「んおっ……くすくすっ、やばぁ～い、お兄さんのざこちんぽでぇ、キャシーまた腹ボコになっちゃった～♪」
キャシー「くすくす、キャシーの膨らんだおへその下にぃ、お兄さんのバキバキちんぽがあるんだよね～？　くすくす、くすぐっちゃえ～、こちょこちょこちょ～」

キャシー「んぁぁっ♪　やだー、お腹越しに触られただけで興奮したの～？　やばぁ、ヘンタイさんだぁ～♪」
キャシー「これからヘンタイちんぽしつけるために、たあっぷり交尾してあげるからね～？　キャシーが良いよって言うまで、イッちゃダメなんだよ～？」
キャシー「くすくす……じゃあ、動いちゃお～っと……んしょ、ん～しょっ」

キャシー「んおっ……おうっ……んんっ、あーヤバぁい……っ、んんっ、キャシーのみせーじゅくな身体……このちんぽに慣れてきたかもぉ……」
キャシー「あんんっ、はぁっ、んぁぁっ……んおっ……おうっ……あんぅ、もう、お腹のちんぽが暴れまわってるぅ～♪」
キャシー「妖精と交尾できて嬉しいの～？　くすくすくす、交尾大好きなヘンタイちんぽじゃ～ん♪」

キャシー「んんぁんっ、あうっ……きゃぁんっ……やっ、はあんっ……ほれほれ～。妖精さんの交尾ピストンだよぉ～♪」

キャシー「ざこちんぽはすぐにイッちゃうかな～？　どうかな～？　キャシーの交尾にひいひい言ってるねえ～？」
キャシー「はぁっ……んんんぁっ……やぁんんっ……妖精にオモチャにされて気持ちよくなっちゃえ～♪　くすくすくすっ」
キャシー「あ～あぁ～……んんんっ♪　なさけな～いお兄さん～♪　一体いつになったらざこちんぽ卒業できるのかなぁ～？　くすくす……」

キャシー「んおおおっ!?」
キャシー「おっ……んごぉっ……ちょ、ちょっとお兄さん、そんな強くちんぽ突いたら……おうっ!?　キャシー、壊れちゃうでしょぉ……」
キャシー「はー？　怒ったのー？　……おうっ!?　んごぉぉっ!?　ちょ、まっ……これくらいで怒るとか、子どもにもほどが……んのおおっ!?」
キャシー「あぐぅぅっ！　ふぎぃぃっ、ヤバい、んぁあっ、キャシーのお腹ぁ、ぜんぶざこちんぽにひっかきまわされ……ひぐううっ!?」

キャシー「おぐぅっ！　んおぉっ！　おうっ！　おっ、ちょ、ちょっとぉ！　止まりなさ……んおおおっ!?　おうっ！」
キャシー「あううっ！　ダメぇ、おまんこかき回されるぅぅっ！」
キャシー「オナホ扱いやめてよぉぉっ！　んああんっ！　あんっ、ひぎぃぃっ！　んおおっ、バカちんぽでぇ、ごりごりしないでぇぇっ！　んんぁぁぁっ！」
キャシー「お腹の内側、ごつごつ叩かれてるからぁぁっ！　んがっ！　おぐぅっ！　んんっ！　んんぎぃぃっ！」

キャシー「おうっ、おぐっっ、んごぉっ……んぎひぃっ」
キャシー「あぐうぅぅっ！　興奮したヘンタイ人間にぃ、乱暴に、ひぎっ、されちゃってるのにぃぃ……んああっ、おまんこ気持ちいいっ、いぐぅっ、お腹丸ごと気持ちよくなっちゃううぅっ！」
キャシー「なんでぇ？　んおっっ……さっき指で、おまんごくりくりされたから……？　んごっ、んんぁっ、あんんっ！」
キャシー「んおっ、はあっ……！　あんっ！　んんんっ、うぐぅっ、内側から腹ボコされてぇ……おまんこイクっ！　あー、イグッ！　イグうううううううッ！」

キャシー「んんんんぁあああっ！　ヘンタイおちんぽでイグっ！　イったっ！　今キャシー、イッたからああっ！　んんんんあああっ！」
キャシー「すとっぷ！　お兄さん、すとっぷだよぉぅ！　このままされたらキャシーおかしくなっちゃうううッ！」

キャシー「んんおおっ……おうっ……んんっ、はあっ……あー……はあっ……」
キャシー「ふう、ふう……もう、キャシーを……こんなに乱暴に、許さないんだからねぇ……」
キャシー「はー、はー、ああ、よだれ、垂れてるぅ……バカぁ……」
キャシー「信じらんない……言うこと聞かないオモチャは……妖精仲間みんな連れてきて、永久しゃせー道具に変えてやろうかなぁ……」

キャシー「おぐぅううっ!?　ちょ、ちょっとぉ……!?　こらぁ、動いていいなんて言ってな……きひぃんっ！」
キャシー「んんんっ！　あんっ！　んんぁぁぁっ！　んんもう！　なんで言うこと聞いてくれないのよぉぉっっ！」
キャシー「あんぁっ！　はぁんっ！　んんっ！　んぎっ！　おうっ！　んおっ！」
キャシー「んんおっ！　おうっ！　あうぅっ！　い、イッたばっかのぉ、ビンカンまんこにぃっ！　ひぎぃぃっ、ざこちんぽ刺激がぁ、ごつごつくるぅぅぅっ！」

キャシー「んんほおおうぅ!?　う、嘘でしゅっ、ざこちんぽって言ったの嘘でしゅっ、ごめんなさいっ！　んおおおっ！　妖精イかせまくるうぅっ、つよつよちんぽでしゅうっ！」
キャシー「おちんぽ様オモチャにしようとしてごめんなさいっ！　ひぎぃいっ！　んおっ！　だからぁぁ、もうちょッと優しく……ねっ!?　んおおおっ、優しくしてぇ！」
キャシー「んんんぎいいっ！　優しくって言ってるのにぃぃ！　ごつごつピストンくりゅうっ！　全然優しくにゃいいっ！」
キャシー「おごぉっ！　おちんぽ様がぁっ、キャシーのことをぉ、精子吐き出し妖精に変えようとしてくるぅぅっ！　んごっ！　おうっ！　ひぎいっ！」
キャシー「ああーダメっ、んんんっ！　お腹の中ぁ、おちんぽ様がびくびく跳ねてるぅっ！　キャシーのお腹、精子で膨らまそうとしてるぅぅ！」
キャシー「おごおぉおっ！　またイグッ！　オモチャちんぽの反逆ピストンでイグッ！　イグッ！　キャシーまたイキますううぅっ！　んひいいいっっ！」

キャシー「んひいいいいっ！　おうっ！　んごごおおっ！　おひっ……いぐっ、イッたおまんこに、精液大量に出されてぇ……んごおおおっ！」
キャシー「んんんぁっ、はひいいいっ……おおおうっ……ち、力、抜けて……動けなひぃっ……」

キャシー「ひぐぅっ……!?」
キャシー「んんごおっ！　おうっ、きゃ、キャシーのおまんこからぁ、精液噴き出しちゃっ

てるぅ……ひぐっ、ど、どんだけ出したのよぉ、バカぁ……」
キャシー「んんっ♪　おうっ♪　ど、どーすんのよこれぇ……精液だしてもだしても……んおおぅっ……全然追いつかないじゃないぃ……」
キャシー「おぐぅっ……くひっ……あんんっ！　精液排出する度にぃっ……浅イキしてるぅぅ……んごっ……おうっ！」
キャシー「ざこちんぽのくせに……生意気なことばっかして……許さな……んんあっ！あんっ……んんひぃ……はぁん……んほぉ……ぁ♪」

８．　　【ルート分岐】質問　～無垢なる悪意～

キャシー「ふう……まったくもう～」
キャシー「どんだけキャシーのこと乱暴にするの？　あんなの反則だよ反則、ルール違反！しゃせー遊びのルール違反！」
キャシー「はあ？　確かにちょっとイッたけど、たまたまだしっ！　おにーさんのザコちんぽでイクわけないでしょっ！」
キャシー「ま、まあ？　多少は強いちんぽみたいだし……きゃははっ、少しだけなら、お兄さんのこと認めてあげてもいいかもね～♪」

キャシー「さて……と、これからのおにーさんだけどぉ」
キャシー「キャシーね、捕まえた人間を、友達の妖精にも見せなきゃいけないんだぁ。だから、今度は、大勢の前でしゃせー遊びしてもらおっかなぁ？」
キャシー「おにーさんのおちんぽ見たら、みんなもきっと驚くと思うなあ」
キャシー「え？　そんなの聞いてないって？　くすくす……そりゃそうだよぉ、言ってないもーんっ♪」
キャシー「今までも捕まえた人間、妖精たちの目の前でオモチャにしちゃったんだよぉ、キャハハハっ♪」

キャシー「えー？　イヤなのぉ？　お家に帰りたいのぉ？」
キャシー「ふーん、あっそ。キャシーをあれだけ乱暴にしたのに……そんなワガママ言うんだぁ？　へーえ？」
キャシー「ふんだ、それならそれでいいよ。じゃあ、キャシーもおにーさんと一緒に、外の世界を見てみよっかなあ」
キャシー「本当は妖精の掟で、樹海を出ちゃいけないんだけどぉ……おにーさんの頭を乗っ取ったら……きゃはははっ、こっそり出られるかも♪」

キャシー「乗っ取りだよ、乗っ取り♪　きゃはっ、チェンジリングって言ってぇ……見た目は人間だけど、頭を妖精が乗っ取っちゃうの、くすくす♪」
キャシー「おにーさんは、頭の中、全部キャシーの声で埋め尽くされて幸せだしぃ……」
キャシー「キャシーは、見たことない樹海の外に出れて、幸せ……だよっ♪」
キャシー「おにーさんの身体使ってぇ、外の世界で、いーっぱいイタズラしちゃおっかなぁ……きゃはは♪」

キャシー「くすくす、おにーさん、どっちがいーい？」

キャシー「一応、希望を聞いてあげよっかな～♪　他の妖精たちの前で、キャシーと本気の交尾勝負するのとぉ……」
キャシー「キャシーに負けましたぁ……って敗北宣言して、その身体ごとぜーんぶ、キャシーのオモチャにさせるか……」
キャシー「キャシーはどっちでもいいよ～？　ざこおにーさんに負けるわけないもん……きゃはははッ！」

９a.　　【わからせルート】終わらないしゃせー遊び　～どっちがオモチャ?～

キャシー「くすくす……」
キャシー「あ～あ、みんな新しい人間が興味深くてぇ……いっぱい見てるね～♪　きゃははは」
キャシー「えっ？　わかんないの？　まあ、人間にはあまり姿を見せたがらないけど……その辺にいっぱいいるんだよ～？」

キャシー「ほうら、いっぱい気配がするでしょ～？　きゃはっ、みんなに見られちゃうね～♪」
キャシー「きゃはは～♪　いえ～いっ、みんな～、みってるぅ～？　今からこの人間を、しゃせーしかできないオモチャにしちゃうからぁ……」
キャシー「みんな見ててね～♪　しっかりオモチャにしたあとは、またみんなで寄ってたかってしゃせー遊びしちゃえば……んおううッ!?」

キャシー「おうっ……んおっ……は、はぁぁ～？　こ、このざこちんぽぉ……まだ入れていいなんて言ってないのに……おぅっ」
キャシー「んんんっ！　ひいんっ……はあんっ、んあっ……ま、まだ話してる途中だったのにぃい……んんんぁっ！」
キャシー「あんんっ！　はんんっ！　おうっ、おにーさん、もうすっかりぃ、私を腹ボコにしてぇ……ちんぽ突くの、得意になっちゃってるぅぅ」
キャシー「んああんっ……おうっ……くひぃっ……ほ、他の妖精にもぉ、見られてるのにぃ……ひぐっ!?　んおっ……んんぁぁっ！」

キャシー「み、みんな……これはね？　違うからぁ……このおにーさんは、こういうふうにしつけてあるだけだから……」
キャシー「ほうら、ちんぽがキャシーのお腹をゴツゴツついてぇ……んはあんっ……ほおぉぅっ……！　きゃ、きゃはぁっ……すごいでしょぉ？」
キャシー「みんなうらやましいよね～？　ほらほら、ざこおにーさん♪　そんなヘコヘコ腰フリじゃなくて、もっとしっかりしゃせー遊びしないと～」
キャシー「んおおっ！　はぁんんっ！　んごぉぅっ！　おうっ！　へ？　へえ～、や、やればできるじゃ～んっ♪」

キャシー「じゃ、じゃあおにーさん？　そろそろみんなにぃ、いーっぱいブザマにしゃせーするところ見せてあげてね？」

キャシー「んんんぁっ、はんっ！　おうっ！　んんおっ！　おほぉぉっ！　んんんっ、ちょっとぉ、激しくするだけじゃなくて、射精をぉ……くひぃいっ！」
キャシー「もう！　なんで出ないの！　練習の時はすぐイク雑魚ちんぽだったのにぃ！」
キャシー「キャシーの言うこと聞かないちんぽなんかキライ！　もうキャシー知らないから……んおごぉぉっ!?」

キャシー「ひぐううっ!?　キャシーのこと、そんなに強く掴まないでぇ……んおほぉっ！　ほごぉっ！　おうっ！　あんんっ！　きひいぃいッ!?」
キャシー「んんおおっ！　ちんぽがぁ、キャシーの中、ごつっ、ごつっ、ってぇ、かき回してくるぅぅぅっ！」
キャシー「おおんっ！　くひいぃぃっ！　あ、ダメ！　これされるとぉぉっ、キャシーすぐイッちゃうからぁ……んごおっ！　おおうっ！　あうううっ！」
キャシー「キャシーイクッ！　ざこちんぽに強力ピストンされてぇ、いぐぅ！　おまんこバカになるぅぅぅ！　おほおおっイグっ！　イクイクイクイクゥゥゥ————ッ！」

キャシー「んくひぃぃっ!?　キャシーもうイッた！　イッたからぁぁっ！　もう、おしまいっ、しゃせー遊びおしまいだってばぁっ！」
キャシー「んごぉっ！　全然言うこと聞いてくれないぃっ！　みんな見てるのにぃっ、おほぅっ！　キャシーがしつけられてないのバレちゃったあぁぁっ、んはぁうぅっ！」
キャシー「ひぐぅ……どうして言うこと聞いてくれな……んごぉぅ！　おうっ！　んひぃぃっっ、キャシーまたイグっ、もうイキ癖ついちゃってるぅぅ……！」

キャシー「んんくひいっ！　イグ！　またイきましたぁぁっ！」
キャシー「ごめんなひゃいっ！　散々バカにしてごめんなひゃいっ！　おちんぽザコじゃないですぅ、キャシーをイカせるつよつよおちんぽ様でしゅうっ！」
キャシー「んぐひぃっ！　またイグゥぅっ！　もうおちんぽ様にお腹ゴンゴンされる度に、おっきいアクメきちゃいましゅうぅぅっ！　んおおおイグゥゥゥゥッ！」

キャシー「ぁぐひいいっ！　んほおうっ！　もうイクのいやぁっ、気持ちいいの辛いでしゅううっ、おちんぽ様たしゅけてぇっ」
キャシー「んんおっっ！　おひいいっ！　おちんぽ様、キャシーのことオモチャにしていいからぁっ、イッてぇ、射精して満足してくだしゃいいっ」
キャシー「んぉごぉっ、激しいピストンきたぁっ、イグッ、またイグゥっ！　おちんぽ様もぉ、しゃせーできそうでしゅかっ」
キャシー「ほおおんっ、キャシーも頑張りましゅからっ……イッてぇ！　キャシーの妖精おまんこでイッてくだしゃいっ」

キャシー「んんぐひぃぃっ！　あっ、クるっ、すっごいのクるっ、んごぉっ、ほおぉっ！　んおっ！　あーイグっ、イグッ」
キャシー「ザコおまんこ、おちんぽ様のピストンでイきましゅううっ！　んごほぉっ、んおおおおっ！　あーイグイグイグッ！　んおほおおっイグうううううううううッ！」

キャシー「んんんあああああイグぅっ！　全身アクメしゅごいいいいいッ！」

キャシー「あー……はあっ、はあっ……やっとピストン、とまったぁ……」
キャシー「おちんぽ様ぁ、キャシー、じょーずにできましたかぁ……？　あへぇ……んおっ……しゃせーさせるのが得意なオナホ妖精になれましたかぁ……」

キャシー「おほぉぉっ♪」
キャシー「きゃははっ……あんっ、おちんぽ様、余った精液、もっとキャシーにこすりつけてぇ……えへへ……んおっ、じゅる……れる……んちゅううっ……あーむっ……苦いけどぉ、一生懸命、味わいましゅねぇ……」
キャシー「これで……キャシーは……人間様のオモチャでしゅう……きゃははは……」

キャシー「……なーんて、言うと思っちゃった？」
キャシー「きゃははは、おにーさん、ヤッちゃったねえ……みんなの目の前で、キャシーをこんなメチャクチャにしちゃうなんて……」
キャシー「おかげでみんな、おちんぽに興味津々……くすくすくす、きっと妖精みんなが満足するまで、離してくれないよぉ……？」
キャシー「まあでも、このつよつよおちんぽなら……大丈夫かなぁ？　体力の限界まで頑張ってね、おにーさん……？　んーちゅっ♪　あむぅっ、じゅる、れろぉぉ……♪」

９b.　　【乗っ取りルート】チェンジリング　～おにーさんの身体はキャシーのもの～

キャシー「ふーん……あっ、そ。おにーさん、どうしても樹海から出たいんだ～？」
キャシー「いいよぉ、帰してあげるね。ただしぃ……約束通り、キャシーがおにーさんの頭を乗っ取って、チェンジリングしてから……だけどぉ」

キャシー「きゃははは、動けないでしょ？　もう逃げられないからね～？」
キャシー「これからキャシーの意識を、おにーさんの脳内に移植していくからぁ、おにーさんはそこで大人しくしててぇ？」
キャシー「ダイジョーブだって♪　おにーさんの意識は、脳の隅っこに残してあげるからぁ……飽きたら身体も帰してあげるねっ♪」
キャシー「じゃあ、まずはあ……」

キャシー「きゃはは、こっちから侵入してあげるねぇ～？　今から、耳から脳に直接、私の意識を移していくよ～？」
キャシー「最初はちょ～っとだけ気持ち悪いかもだけどぉ……すぐ慣れるから安心してね～？　む～ちゅっ、ちゅば……れる、じゅるるぅ……」
キャシー「ほうら、わかるぅ？　もうねぇ、魔法で私の意識を……じゅばっ……れろぉぉ、おにーさんの奥に……入れてるんだよ？」
キャシー「神経を通ってぇ……じゅばっ……れろぉ……だんだん侵入していってるんだけど……わかるかな～？」
キャシー「……あっ♪　おにーさんの脳神経、見～つけたっ♪　じゃあこれから、おにーさんのアタマ、いただいちゃいま～すっ♪」

キャシー「きゃはははっ♪　入れた入れた～、おにーさんのアタマの中、こんなになってるんだぁ♪」
キャシー「うへぇ、考えてること、スケベなことば～っかっ♪　だっさ、ダメ人間♪」
キャシー「ダメ人間に相応しく……これからキャシーが、おにーさんの身体を使って、たくさんイタズラしてあげるね♪」

キャシー「おにーさん？　聞こえてる～？　まだ意識あるよね～？」
キャシー「こうしてる間にもぉ……キャシーがおにーさんの身体、どんどん乗っ取ってるんだよ～♪」
キャシー「まあ、全身がなじむにはもうちょっとかかるかもね～♪」

キャシー「うん、うん、手は、うごくね〜♪　右手も……左手も……おっけー」
キャシー「足もどうかな〜？　お、大丈夫大丈夫〜♪　きゃはは、順調順調〜♪」

キャシー「きゃはは〜♪　でも、まだ脳神経は全部乗っ取れてないみたいだから〜♪」
キャシー「おしゃべりでもしてよっか〜？　おにーさんの意識の残りカスさん？」
キャシー「あっ、口もキャシーが乗っ取ってるから〜、喋れないんだった、ごめんね〜♪　キャシーのカワイイ声聞いててね〜♪　きゃはははッ♪」

キャシー「キャシー、樹海を出たら、どんなイタズラしちゃおっかな〜？」
キャシー「うーん……せっかく男の身体だしぃ……人前でしゃせー遊びしまくるとか？　きゃっはは、たのしそ〜♪」
「おにーさんがどこまでブザマなヘンタイになっちゃうか、試してみるのもいいかもね〜♪　きゃはは♪」

キャシー「う〜ん……よしっ、と。脳内乗っ取り完了〜♪」

キャシー「きゃはははっ、これでおにーさんの身体はキャシーのもの〜♪　いえ〜い♪」

キャシー「じゃあ、おにーさんの身体を使い倒しちゃうからぁ、おにーさんはそこで見ててね〜♪」

キャシー「だ〜いじょうぶ、この身体も最後にはちゃあ〜んと返してあげるよ〜？　まあ、色々とボロボロになってるかもしれないけどね〜♪」

キャシー「きゃはっ、きゃはっ、きゃはははは———……♪」

(END)